

# 「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫

◆◆◆ No.0486 ◆◆◆

18/06/06

## 【 動く or 動かない、両極端な値動き多い 6 月相場 】

筆者は経験則の観点から、5月2日付の当レターで「荒っぽい変動の多い5月相場」とレポートしたが、結果からすると月間を通した変動幅は3.27円で、今年3月(2.66円)に続く小変動に終わった。一見すると、むしろ静かで安定した値動きだったと言えるだろう。つまり、過去の経験則が大外れに終わったとも言えるわけだが、懲りずに足もとの6月相場についても、やはり恒例となっている経験則の観点から動静を考えてみたい。それによると、6月は「動くか動かないか、両極端になりやすい」傾向がうかがえる。5月が小動きで終わったことから、その反動を期待したいところだが、果たして実際のところはどうだろうか？

### ◎5月と逆に動くパターン多い、それからすると今年は「ドル高有利」!?

6月相場の動静を指摘する前に、前段でも指摘した5月相場について、いま一度振り返っておきたい。「荒っぽい変動が多い」とレポートしたものの、今年3月に続く小変動に終わったという結果に大枠で間違いはない。しかし、日々の値動きをよくみると5月は月初の108円台から111円台までドル高進行、そののち再び108円台へ下落という展開をたどっている。したがって、月間の高値から安値を差し引いた「月間変動幅」をみるとわずか3.27円なのだが、実際には108→111→108円と、月間を通してなかなか激しい上下動で、トータルの価格変動は単純計算でも6円を超える計算だ。ちなみに、今年一番の変動を記録している月は年初1月の5.10円なのだが、ご承知のように1月は「月初高の月末安」、1ヵ月かけて5円強のドル安が進行したわけで、そう考えると一見小動きに見える5月相場が実はところもとも動いていたのかも知れない。

ともかく、そんな5月相場を踏まえた、足もと6月の月間相場見通しについて以下でレポートしてみたい。まずは恒例となっている月間の星取表を見てみると、6月の勝敗は1990年以降昨年までの28年間で15勝13敗だった。わずかにドル高が有利ではあるが、それでも五分に近い内容で、目立った特徴とは言えないだろう。

しかし、過去の6月相場には興味深いポイントが別途2つある。うちひとつは、「動くか動かないか、両極端になりやすい」傾向がうかがえること。「動く」事例を挙げれば、1ヶ月のあいだに13円以上も動いた1998年(高値146.75円、安値133.60円)になるだろうし、後者の「動かない」事例はと言うと月間変動率がわずか1.80円にとどまった2011年や同1.56円の2014年が挙げられよう。今年がどちらになるのか、「神のみぞ知るところ」ではあるが、参加者のひとりとしてすればやはり大きな価格変動を期待したいところだ。

なお、今年の6月を見た場合、カレンダー的に取り巻く興味深い出来事が2つある。うちひとつは、5月9日の当レターでレポートした「ラマダン」であり、5月16日から始まったものが6月14日ごろに終了するもようだ。また、前述した9日付レターで指摘したように「経験則に期間中の為替市場は小動きに留まる公算が大きい」ものの、終了後はその限りではない。中旬以降、月末にかけて荒っぽい変動をたどる展開にも注意を払いたい。もうひとつの興味深い出来事は、ラマダン終了と歩調を合わせる格好で、今度は「サッカーのワールドカップが始まる」ということ。こちらについては、後日改めて別途レポートする機会があると思うので詳細は省くが、やはり過去の経験則を参考にすると「ワールドカップ期間中の為替は小動きの傾向」が強いということだけは頭に入れておいて損はないように思っている。

一方、6月相場におけるもうひとつのポイントは、6月単体で見た場合、前述したようにほぼ五分五分で明確な方向性がうかがえないなか、近年は「5月と逆方向に動くことが少なくない」一ことになる。この経験則の面白いところは、たとえば2000年以降でみると、2008年までの9年間で8回が「同じ方向」に動いていたのだが、それ以降、2009年以降昨2017年までの9年では8回が「逆方向」に動いていることだろう。ちなみに、唯一の例外は2010年で、以降昨年まで7連勝中だ。ともかく、一度方向性が示されると、そのパターンが続く傾向がうかがえることになる。今年の5月相場は、

